

未来の生：アウグスティヌス幸福論の一考察

上野, 正二
日本学術振興会：奨励研究員

<https://doi.org/10.15017/27560>

出版情報：哲学論文集. 15, pp.115-118, 1979-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

発表要旨

未来の生

——アウグスティヌス幸福論の一考察——

上野正二

アウグスティヌスは彼の最も初期の著作である『幸福論』において幸福を賢者の魂に宿るとのべたことを、後に訂正して言う。

「完全な神の認識、すなわち人間にとってそれ以上に大いなるもののないものを、使徒パウロは未来の生 (futura vita) に望んでおり、この生のみが幸福な生とよばれるべきである……」 (Retractationes I, 1, 2 傍点筆者)。

以下は、この未来の生が語られる本来的な場所を明らかにするための試みである。

未来の生

ところで、『幸福論』や『三位一体論』第十三巻や、またここで主に取扱う『告白』第十巻 (Confessiones X, 20, 29) で、アウグスティヌスは、我々すべてが幸福を求めるといふ命題を議論の出発

点に据て、そこからある場合には幸福の条件として永久不変の欲求対象たる神を導き出し、ある場合には永遠の生がなければならぬという説を展開する。我々はこういうところに「永遠の生」幸福な生」を想定し、未来の生を語る場所を見る誘惑に駆られる。けれども、後に述べるように、「万人が幸福を求めている」という命題自体が吟味されねばならぬものである。我々は問題の出発点にたちどまって、彼が幸福をどのように理解していたかを明らかにしなければならぬであろう。

さて、彼は『告白』(X, 6, 8—X, 26, 37) で万物の存在の根拠たる神を知る道を語ろうとしているが、そこで言う。「わが神なるあなたをたずねる時、私は幸福な生をたずねている」(20, 29)。しかし、このたずねるということは注目すべきことである。彼は言

う。「充分だ、これが幸福というものだといえるまでは、幸福な生はまだ私のもとにない。」それでたずねなければならぬのだが、しかし知っていなければ（記憶していなければ）今たずねることがどうして行なわれているのかわからない。一般に何らかのものをさがし出すということが可能であるためには、「それをそれとして認める (*agnoscere*)」ことがなければならぬが、「それとして認めること」があるためにはおぼえていることが必要であるからである (X. 19. 28)。こうして、たずねる者は記憶のうちにあらずねるべきであるということになろう。だが問題はこの記憶を正確に把握することにかかっている。記憶しているならば（知っているならば）もはや探究は不要ではないかという問が待ちかまえているからである。この一種の記憶は、同様の問題場面で「幸福の観念が我々の精神に刻印されている (*in mentibus nostris impressa est notio beatitudinis*)」(De libero arbitrio II. 9. 26)とも表現されているものである。

アウグスティヌスは、幸福な生とはよろこび (*gaudium*) であるとして言う。「よろこばしい時に心の中で経験したのであり、その知識が記憶にはいったので、いまそのよろこびを、よろこんだと記憶する対象に応じて、時には軽蔑をもって、時にはあこがれをもって想い起こすことが出来る」(X. 21. 30)と。だが、これが幸福を求める者のもとに観念としてあるものとして語られる記憶であろうか。我々は次のように否定的見解を述べねばならないであ

らう。

アウグスティヌスが探究に先立つものとして述べる記憶、或る根原的な記憶は、このようないわば「過去の記憶」とは別のものであるように思われる。まず、根原的な記憶は先に引用したところからすれば、幸福を幸福として認める規範的なものであった。従ってそれは経験によってあるものではなく、むしろ逆にその都度の経験の成立の根拠となるものでなければならぬ。次に、アウグスティヌス自身が「いかなるよろこびをよろこぼうとも私は幸福だと思ふこの考えを遠ざけ給え」(X. 22. 32)というように、何であれよろこびが幸福だとは言えない。幸福な生とは或る決定的なもの、「あなた(神)をめざし、あなたによって、あなたのゆえによりよろこぶこと」(*in*)である。ただし、これ自体解釈を要する。

では、そのような観念の記憶はどのように語られるのか。アウグスティヌスは、神を知るようになって以来、神は彼の記憶のうちにとどまるようになったのであり、それ以前には記憶の中になかったはずはないといふ (X. 24. 35) 結局、神を見出し知ることになったのは「私を越えたあなたにおいて (*in te supra me*)」(X. 26. 32) だという表現を残している。この表現は強力な手がかりを与えるであろう。

アウグスティヌスは、あれこれのものを善いと言うような「判断の場面」を考えている。彼によれば、判断は判断されるものを

真理という内的な光のうちで見ることによって行なわれる。あるいは、判断されるものと判断の規範 (regula) あるいは真理 (veritas) と照合すること (conferre) によって行なわれる (cf. X, 6, 10)。従って、我々が日常、善についての判断を行っているそのことからして、我々はその規範たる善そのもの¹ 神を知っているはずだとされ、この規範がどこに見られるかというところで右の表現と類似の句が語られるのである。「汝自身に帰れ、内なる人のうちに真理は住む。……汝自身をも越えよ」(De vera religione 39, 72)。——しかし、知っているはずのものが何故にあえて「汝自身へ帰れ」といわれるのか。この不明瞭さが次の問題につながってゆく。

我々はあれこれの善について判断する時にたしかに原理的な規範に依拠するのではあるが、我々は根源にどこまで溯源できるであろうか。我々の溯源しうる規範と、究極の、神とよばれる規範とは無限の隔りがあるとも考えられるのである。

また、我々には善についての判断 (i. s. good) に例えば金についての判断 (i. s. golden) を対比して見る時、そこでは金そのものを知らずとも、日常的に全く新たな事例に対処しうることからして、善の場合にも、判断をふり返る時にそこにその規範の存在の必然性を認めざるを得ないことと、その規範について観念を有していることは別であることが予測される。

右の三つのことごらの関係を語るテキストとして次の箇所があげられよう。「義人であると信じられる人は、愛する者が自らのも

とで認め知解するこの形相と真理に基づいて愛される。ところがこの形相と真理自体はそのように他によって愛されるものではない。なぜなら、我々は形相と真理以外にはそのようなものを見出さず、従ってそれが知られていない時には我々がすでにそのような或るものを知っているそういうものに基づいて愛するであろうから」(De trinitate VIII, 6, 9)。「そのような或るものを知っているもの」とは、規範的形相に依拠して判断される方がらである。だが、そこでも規範的形相をまたずに何らかの形相が見られているのである。実際、そうでなければ、そのもの、形相と同定するということもあり得ないであろう。否、そののみか、そのものの形相自体が知られていない時には、そのような諸々の形相にもとづいて信じることによって愛されるとアウグスティヌスは言う。

我々は「それを知らなければたずねることはどうして行なわれるのか」という問に対する答——先には一応、根源的な記憶があるからだとした——をここに見るであろう。アウグスティヌスは人間としての教師の役割を充分に知っているのであり、通常の記憶が語られるその場所に観念の形成が認められるのである。ただ、その観念は完成した形相ではない。我々はこの不完全な形相を学習の出発点として (cf. De ordine II, 9, 26)、或る仕方ですれらの根拠たる完成した形相の——いかなるものであるかは認識しえないとしても——存在を知り、かつ愛することができるのである。

いま我々が問題にしている、幸福の生に関する、あるいは神に関する探究は、右のような形相におけるズレに拠ってあるものであり、不完全な形相から完全な形相へと向かう精神の運動である。

このこと、そしてとりわけ後者の形相のあり方が、我々に当面の議論の結論を告げ知らせているように思われる。即ち、探究されるものは、探究されるということからして現在しないものであるが、それにもかかわらず、全きものとして探究されるのであり、その限りにおいて全きものとして現在するのである。このような存在の様相をもつものは、希望 (spes) としてあるもの (cf.

Ret. I. 1, 2, Conf. X. 8, 14) であり、ここではその立ち入った考察はできなかったが、すぐれて「未来」として語られるもの (cf. X. 8, 14, XI. 18, 22-24) なのである。

附記 口頭発表での題目は「将来の生」であったが、水崎博明氏の御教示により改めた。論旨にも小さからぬ修正を余儀なくされた。

(日本学術振興会奨励研究員)